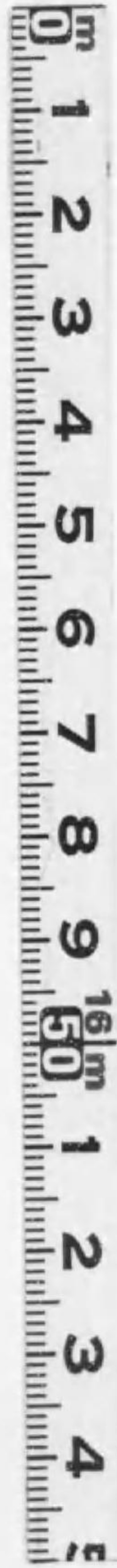
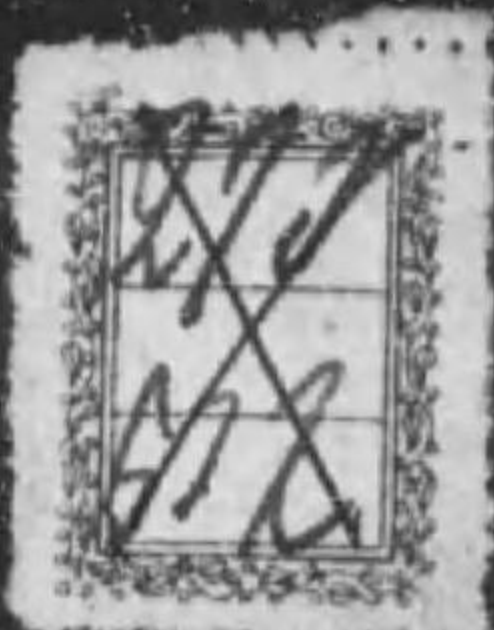


特116

708

大典	高野	梅	笛	神
	物狂	仲	卷	歌
番外	菊	光	木	楠
	慈童		曾	露



始



47116
708



神歌

概説

番外

神歌は神事演舞なる「翁」の章句にして、句意頗る晦澁なるも全篇に亘りて天下太平國土安穩の祈願を精神とするものなり。されば能にして能に非ずと稱せられ、之を勤むる者最も清浄なる態度を以てす。

翁 とうとうとうたりたりたり

地上 ちりやたりたりたりたり

あかりらりりりり 千尋上 鳴るは籠の

あ。鳴るは籠の 水日ハ照るとも

地上 絶えすともたりありりりり

うさう 千尋 絶えすともたり。常に

とうたり 千歳舞 君の子業ぞへん事

も。天 元 津少女の羽衣よ鳴るハ籠
の水日ハ照るとも 地上 絶えすと

うたりありりりりりりり 千尋

翁 總角やととや 地上 尋たかりや

とととや 翁上 窟して居たれとも

地 美ららうねんけりやととや 翁上

早ある神のひささの昔より久

一かれとそ脱ひ 地上 飛ぶやうちや
翁上 およそ子年の鶴の萬歳樂と
 謡うたり。又萬代の他の壱壱へ
 甲に三極と傳へたり。 上 渚の砂
 さくさくとして朝の日の色を
上 朗。龍のおひびきききして夜の月
 あきやかに傳へたり。 元下 天下太平

國土安穩。今日の新禱あり。
上 左原や。 上 なるの翁も 地上 あれは
 あその翁も。 元 そやいつくの翁
元 とうとう 翁上 ねよ 翁下 や 翁舞 千秋萬歳
上 の歌ひの舞あれは。舞まはらう
地下 萬歳樂 地下 萬歳樂 翁上 萬歳樂

楠露

新物ノ一

楠正成、足利尊氏が九州の兵を集めて都に攻め上れるを湊川に防がんとて出発の際、愛子正行を櫻井の驛に呼び、臣恩地満一と共に故郷に歸らしめんとしたるに、正行父と最後を共にせんとて聴かざるを叱りすかして遂に別を惜む冥を張り、舞など舞ひて、父子主従涙の袂を分かちけり。

此曲ハ居着カ又様ニサラリト謡フヲ宜シトス

シ	子	ト	シ	役
テ	方	モ	テ	別
恩池満一	楠正行	殿太刀持	楠正成	
小刀 神扇	士烏帽子 着附厚板 掛直垂 白大口 腰帶	小結烏帽子 着附厚板 長短 白大口 腰帶	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附無色厚板 上下直垂 白大口 小刀 神扇	装束 附
(目番二略)目番四		曲柄	月 五	季
部ノ等 高 準		警吉唄	所	

楠露

作者不詳

シテ正成河確リト朗カニ

引れハ楠正成なり。さても羽敵尊

氏大舉して上洛す。まき由圓し。る

れ。急ぎ正成に馳せ向ひ。義貞に

カと合せよとの宣旨に任せ。只今

兵庫の津へ居り下り。又存する

子細の山岡。正行と故郷へ歸。さな

南露

やと思ひ候いかに誰かある御前トモカ持サアリ

はる正成備一に正行をつれて此方

へ奉れと申し候へトモサアリ畏つて候いかに

恩地殿オシに申し候若君の御供申し

急ぎ奉本陣ホシへ御参りあれとの御

事にて候シテ満一畏つて候いかに申し候

は。若君の御供申し候いかに正行正成

用カニ

只今申す事とよくよく聞き候確カリ

もこの度の出陣出陣に成討死すべき時

こそ参りたれカニそれ又付きて正行の

備一と伴ひ。千早に海り命のあらん

程の忠勤忠勤よと教カミひ下と憐アハレみ。

某が志とつぎ候へカニ又備一に候正行の

成長セイの程と頼チヤウむありカニそれとこの

世の別と思ひて。急ぎ故郷へ入りて
子方正行 作謹んで。承りゆさるゝおからるる箭の
 家に生れ。父の最期とよそに見て。
 誰に面と向けぬ。たゞたゞるゝ具
 してたまはり。久正成こごかりき事と
 やす者か。な。これ皆朝廷の御為お
 れ。どくどく千早に歸り。佐へ

子方

いかに君の御為なりとも。疾り歸
 る事。の。なり。か。た。う。ゆ正成やあか程ま
 て。父。が。申。す。事。に。随。ひ。さ。る。や。と。恩カニル上
 愛の子と。比。り。け。れ。ば。正行も拍子合
 備一も。正行も。備一も。行。と。い。ふ。べ
 言の。葉。も。後。く。後。く。袖。と。志。と。り
 畏。つ。た。る。け。り。ま。か。な。畏。つ。た

南窓

三

ふけりまきかま 正成の因 この上は語つて
 聞かせゆべし 語確カリ こそても逆徒尊氏
 兄弟西海より大軍を率ゐる上
 倍すべき由教團に達し急ぎ正
 成に馳せ向ひ義貞諸共追付す
 べきとの勅諭あり 先ラカ心持シ 正成謹んで
 申しよぐる候は。この度逆徒死

りよる事 心持シ あら平しいひ大軍と
 云ひ勞れたる宿軍を以つて食
 ひ留めゆん事 心持シ あか互か存じも
 よらす 先ラカ 義貞とる一席され今上
 度教山へ行幸ありなりなむ必
 定逆徒上倍はりゆべし 先ラカ 其の時
 正成の糧道をたち。義貞と内外

より攻め伏せんにおいての。恐れお
 からは勝利疑あるべからずと必勝
 の計議と申しよぐるといへども
 坊門殿のさへにて既に防戦不
 定まるる事。偏に天運の極あり
 くれ地上ツヨク
 此れ日月よらに明らかなれども
 雲霧を霞みならひ。今にほ

○サ面独吟

めぬ事あれども。歎きてもまた
 あまりあり。良薬口に苦く。忠
 言耳に遠し。その故事と
 悟り終ひ。藤房の卿の世と道れ
 今正成が首途も引きの返さ
 武士の。正成中用カニ
 やたけの心あり。清く
 世といさめんと思ふなり。獅子

のふと生みて三日と経る時、
千丈の巖よりこれを投げて、
その獅子の氣があれれば、
宙よりはね返りて死
せざるなり。況んや正行十歳
に銘りぬ一言耳に留めつ
教誡よ遠のぐれわれ討死と
聞

くとも。歎きと留めらるるまで
も。朝敵と平らげて聖運の用け
ん事と思ふべし。正成上明カニ
の本。羽との。はとあらすも。
命のあらんその程の帝位と守
護しわたるの心。獅あき跡に
汚名を残す事。あかれ老先思ふ

満一ロギ上三九カカ朗カニ

撫子ハナシにコかルるハ後ノや楠の露
 時トキも須の五月ノ雨ノ古キ枝モ茂クる
 下シ草ノ帯ニ志スる狭カ互
正成上花ハ散ル
トルりテ春ノ芳クれヌし梅井ノ名ニだ
トにありテ朽レらセる石にあるテみ
楠の葉の恨みも何カあまざるかる
正成鄙人までも哀知る
満一上朗カニ恩愛 親子

満一子三誠

主ノ後ノ別レれも今更に後と油に
満一上備一が仇に立ちテ取リあへず甲
拍子合ハズ清き名と千代に傳へテ菊水の流
地流クるき俵ノ門男舞

満一ロカ上朗カニ

衆ノ鏡とありてますらをの

上地サラリ

花ハ橋ノ白ひぬるかな白ひぬるカなカなカなカ

正成中用カニ

かくテ時刻も移るある上同サラリラカなカなカなカ

帰れといふまゝのまゝ。作はるたが主
 後の盡きぬ候とびるかへ。其の
 名も清き河内の國へ歸るの孝
 行留るの忠義の。かゝるまゝためし
 ぞ有難き

笛之巻 新物ノ二

羽田秋長、鞍馬に上りし牛若が學問せず、夜な々京に出で、人を斬ることを憂
 ひ、母常磐の館に伴ひ行き、に、常磐は涙ながらに牛若を諭し、尚傳來の
 笛の謂れを語りしかば、牛若いたと感して、今宵ばかりの名残に、五條の橋
 の月をながめんと、笛吹きすすさみつ、立出でけり。此曲橋辨慶の前半なり

此曲橋舟慶ノ前ナリ概于淀ミナクサラリト謡フヲ宜シトス

役別	シテ常磐	装束	附	季
子方牛若	ワキ羽田秋長	面深井 髪 無色髪帯 着附指沓 無色唐織着流		九
	士烏帽子 着附厚板 掛直垂 白大口 腰帶			月
	小結烏帽子 着附厚板 長絹 白大口 腰帶			曲柄 誓吉唄
				部 京 所
				部 高等準
				(目番二略) 目番四

笛乃巻

作者不詳

早羽田のサラリ

かやうにハ者ハ義朝の侍内はありし

羽田の十郎秋長もて候。さても義

朝の御子常盤の御殿の三男。牛

若殿と申しては産ゆと。学回の名あ

に鞍馬の寺へ御の座せは産ゆ所子

学回とては終まで夜も夜も五條の

橋に出で、数多の人もと御切り俵上
下のおすらひかたがた以つて、あつべ
からずの程に、常盤の御方に事り。
此の事と、シテ母用カニ 教訓させ申さば、やと
ヒラカハ 存じぬ、いかやしよ、秋長が事り
て、シテ母用カニ 何秋長と申すか、此方へ事り
ぬ、ヒラカハ さと、只今ふの行のためよ、来りた

るぞ、ロキサラン 只今、事々の義に非ず。
鞍馬の寺に、ヒラカハ 座の牛若殿、夜お夜
あ、五條の橋よ、御出であつて、数多
の人もと御切り俵上、下のおつらひ方
がもつて、シテ 此方へ、からずの、ヒラカハ ば、此方へ
御申しあつて、シテ 教訓あれ、ヒラカハ とな
シテ 俵上、ヒラカハ 牛若殿の、ヒラカハ 渡り

ゆぞ ワキサラリ あれよば産作 シテ用カニ 此方へと申し

ゆ ワキサラリ 畏つてゆ ヒラカハ 此方へ御来りゆへ

シテ位ラトリ用カニ いかに牛若殿げの程の寺にあるかと

こそ思ひしにけりこそ此方へかたり

たるぞ 子方牛若サラリ こそいぶス〜母上と見え

来らせずゆ程に来りてゆ シテカッテ いかにか

おごこの心とてなるに思ひてらまゆ空

言ふ 運ンデ 此の程平家の公達 キンダチ のの肩を

あらべ〜と争ひ アライシ 同し寺中 シナウ にあり

とこそも ウツク 学回 マカヒ はたに勝れあへ カケ 他 サマ 出

の聞え オボ 寺家の テ 覚え オボ かた カ 母も

嬉 ウレシ しく思 オモ へ マ さま マ 学回 マカヒ とこそせむ

らぬ夜 ヨ お夜 ヨ 五條 イツヂョウ の橋 ハシ に出 イデ て人

と ト 失 ウツク せ セ 聞 キ く ク ぞ ゾ こそ ト 眞 マコト なる ナリ ぞ ゾ

あるあらば。母と思ひあひとも又

ヨウク
拍子三合

思ひまげまよあやあかほら

母の思入ども。そのかひ更にあま上は

志かりてもよしぞあまうたての

者用ル心の心ナトや上あ朝カやサ親サ子サとも

あサらサばサあサかサあサかサよサ安サかサらサぬサ御サ身サの

○名留迄独吟

ためめあるべし。いかにあれば畜類イハヒ又は

空ソラ飛トびカ翔カけるカ鳥トもカそのカ理カりカとカ知カれ

べこそア鳩トにカ三カ枝カのカ禮カとカありカ鳥カまカ

うカまカうカのカ孝カ行カあるカいカかカばカかりカあ

どカやカ御カ身カのカ不カ孝カあるカとカ志カかれカば

牛カ若カもカ手カとカ合カせカ立カちカよりカてカゆ

るカ終カへカとカ後カまカ居カたりカあカおカこカとカ又

雅トかりし時トよりもト。又トに離トれてむト
 ぶんやあ。敵トの手トにも渡トりあトべトいかト
 なる。剣ト川の瀬トもト。侘トみもトやせトまト
 くと心トに懸トけて思トひト。寝トの夢トの二ト
 時ト。花トの夕トべトの山ト。嵐ト。聲ト。高トくト。泣トくト時ト
 はト。六ト。波ト。羅トのト人トやもト。聞トくらんトもト
 のト。とト。悲ト。しト。やト。とト。母ト。びト。てト。落ト。しト。もト。今ト。思ト

出トの便トかト。互ト。母トの作トの重トけトればト
 明トけあト。六ト。寺トへト。登トるトべト。とト。さト。りト。あト。がト。らト。てト
 のト。笛トにト。えト。たるト。便トのト。あト。るト。ぞト。とト。向トいトかト。あト。るト
 謂トひト。ぞト。げト。はト。理トりトのト。不ト。審トかト。互ト。とト。れト
 はト。弘ト。法ト。大ト。師トとト。てト。美ト。まト。人トのト。御ト。笛ト
 とト。傳トへト。たるト。故ト。あト。れト。はト。かト。やト。うト。にト。わト。れト
 もト。しト。ぞト。とト。まト。子ト。かト。上ト。サト。ラト。りト。もト。やト。大ト。師トのト。御ト

手に渡るべしと。たゞかある虫食カ
 たしけあやと戴ま。明けあは寺
 に登るべし。かまひておそし偽る。
 お又よし母は云ひ捨て。常の住
 み家に入りにけり。常の住み家に
 入りにけり。いかに羽田母の作の
 重ければ。明けあは寺に登るべし。

今宵ばかりの。名残あれば。五條
 の橋に出で。忽ち月と眺めろす
 るに。あるぞ。畏つて依

是ヨリ常ノ橋并慶ニテリ前シテヲ除キ
 備も半若母の作の重ければト續ク

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 曾三 and 十一.

木 曾 新物ノ三

木曾義仲、平家の軍を一擧に屠らんと、垣生といへる所に陣取りしに、あたり近く
朱の玉垣をめぐらせらる社あるを家臣に問へば、垣生の八幡宮なりといふ。源氏
の守護神八幡宮の領内なるこり吉兆なれと、覺明に命じて願書を奉納
せしめ、酒宴を催し、神を祝ひしに吉瑞あり、士氣大に振ひて遂に平軍を
打滅しけり。

押し寄ります。味方の僅か五萬

餘騎計略をもつて防かんとして

白旗シテ上衆数多しつゝ黒坂の上は

おし立て敵の心と疑はしめぬ

中にたむろさせ夜に入り追手

撥手カキテより一度にかり俱利伽藍

かカキ用ノル心岩へ敵と落さんとしシテ上衆用意を

○小註

あて義仲の用意をあて義

仲の勢と七年に別らつゝその身

は殊に精兵一萬餘騎と引き率

へハル殖生に陣をとぞ取りにけるシテ殖生

に陣をとぞ取りにけるシテ池田の

ふゆの後の如く黒坂の上よ多くの

白旗と立てて平家の勢これ

を見てあはや千塔徳氏大務向うた
は。取つてあらはれてかかあまま。さ
の便宜ベシの前キありし。礪波山トの山
中チナ。猿サレが馬場ババと申す所に陣ジンを
取つて依ヨ。木曾キゾウ朗ラウカニ
ところあれ。さあらはあ合アヒは明
日ニチたるべし。かまへて味方カタをいまめ

戦シはすして。夜ヨに入イつて押し寄ヨせ
うずるにてゆ。面々オモにその由ユし少
池田イケダ 畏オソつて依ヨ。木曾キゾウ朗ラウカニ
池田イケダ 御前ミマエにゆ。木曾キゾウ朗ラウカニ
夏山ナツヤマの磐イシみの中ナカに。朱アカの玉タマ垣カキ
ほの見ええて。序カ削造ソウゾウの社ヤシロあり。
あれとば何ナニつと申すぞ。いかある

Wam

三

神とあがめ奉りたるぞ 池田サライ 恐れ
あれこそ埴生の八幡宮にて渡ら
せ給ひぬ。この前もその流願の
地にて依 木曾 朗カニ 義仲行と有う陣取
りしに。八幡の御地あるこそ昔祀
なれ。いかに覺明 シテ 重シモリ 御前に依
木曾 朗カニ 且の後代のため一つの當時の祈禱

のため。新書とよまらむとと思ひぬ
いかよ シテ 重シモリ 後の如く。法新書とよま
初あつてあるべうぬ 木曾 朗カニ ことあらば新
書と書き依へ シテ ウケテ 畏つて依 カニ 上 確カリ 覺明
作と受けたまふり 上 確カリ 服のうら
よりも。服のうらよりも。小現料
紙取り出だす。墨すり筆と和

けふが思ひあんずる氣色もあく。
古書とてうろすが如くにてやがて
願書と書きよる。シテ中ニ
頂禮八幡大菩薩へ日域朝廷の本
主累世の君の義祖たり。宝祚と
守らんがため。養生と利せんが
ため。云々の金容と顯して。

云所の権扉を押し開きたまへ
り。志きりのことよりこの
かた平相玉とよ者あつて四海と
掌に。萬民と悩亂せむこれ
佛法のあた王法の教あり。そもそ
も。曾祖及前の隆興の守名と宗
廟の氏族に帰附す。義我仲いや

くも。その後龍をててこの大功
と起す事。たもへハ嬰女見の地。蟻と
以つて。巨海とをむカリ。蜻蛉カ。奇と
取つて。龍車に向ふ如くあり。然
れども君のため國のためはこれを
起すのみあり。伏キして願をくハ神
の納る垂れ給ひ。勝事と宛めつ。

あたと四方に退け給へ。壽永二年
五月日。たからか子續みよけたり。
上ヨスル木曾殿と初めとて。その座にあ
り。兵ども。真に文武の達者か
あ。皆貴人。明とほめはけり。
仲表指抜き。出だ。これと。教書に
取。り。そ。へ。て。内陣に納めよと。究明

○小謡

に賜われども。覚明これと捧げ持ら
流前と立ちてゆーくも。八幡
の宮に参りけり。八幡の宮に参り
けり。いかよ申し上げゆ。流致書
並に御表指の鏑。八幡の宮に奉
納仕りてゆ。又この庄の土民軍の
街門出をと狹し。酒さか馬とあり

て作木苗日朗カニあがるめてたき事こそあ
けれ。この度の軍にかたんするも
必定あり。さらへ軍の門出をと狹みべし。
覚明酌み立ち候へ。畏つてゆ。八幡
の宮の神風は敵の本の葉と敵の奴
べ木苗日朗いかは覚切一さし舞ひゆへ
畏つてゆ。敵の本の葉と敵の奴男舞べし。

○独吟、○月サラリ
酒宴もすずではあかばあり〜上酒
宴もすずではあかばありしよ不思議
儀や八幡の方よりも山鳩翅と
あらへつゝ。味方の旗手に飛ひか
けり。納受のま〜とあらゆけ
れ。木曾殿と初め。軍兵ども皆
一同に伏し拜み。いよいよか護とぞ

新ひける。さしてそ。平家の大
勢と。倶利伽羅が谷に遊ひ
落し。たゞ一戦に勝利を得しも。
ま〜八幡の神があり。

先ツカサリ以下段々進ム心

梅

新物ノ四

藤原の某、難波津の春にあこがれゆきけるに、梅の花おもくらきながめなり
ければ、古歌をおもひいで、「櫻花今さかりなり難波の海おしてる宮にきこ
しめすなへ」とくちすさみける處に、一人の女性現れ、此歌につきて問答し、
梅の事など語りて消え失せしが、後梅の精と現れ舞を舞ひて歸りけり。

小書 緑色 和扇ノ舞 習留 弄月舞 素囃

後シテ梅ノ精	前シテ女	口ツレニ從者	ワキ藤原某	役別	装束	附	季	所
面若女 髮 髮帶 桐箔袴帶 扇	面若女 髮 髮帶 着附摺箔 唐織着流	着附無地鬘斗目 素袍上下 小刀 扇	着附段鬘斗目 拭素袍 白大口 紋付腰帶 小刀 扇				二	撰津國難波浦
目番三	曲柄	月					二	所
傳初	習重	誓吉噴						

梅

左近元章作

早男内

引れ^{早男内}の五條わたりは住居する藤
 原の何某^{ガシ}にていさそもわれ来だ
 難波津と見ずの程又。此の度一
 見せばやしと思ひ^{サシ上}作^{ヨウク}津の國の
 難波の春のゆかりさへ思ひ
 立つ振衣日影長^甲田けま^三秋^{白野ハ}の空

梅

震本隔たる山崎や。開戸の宿も
名のみみそ。戸さぬ流代ツの行き
かみ人の姿さへげおゆたけしウわ
下中トの行姿ぞ舊年の木の枝も
拍子拍子ニ合積る芥川志ばしあからの旅心
上上蘆の若葉のなごはしキみ。蘆の
若葉のなごはしキみ。風も音せ

てよる彼の響音はさすか聞ツま
て戀甲の若葉の浦ウのうらある春
の氣色ツと今ぞウえんしウ春の氣色ト
と今ぞえんしウ面白ウや若葉の浦
の春の氣色。里の花咲ウまウの白ニ備ヒち。
遠ウの山ウえ打ち霞ウみウ青ウ海ウ奈ウの白ウ
波ウの八重折ウる上ウにウ延ウ長ウ小ウ船ウ行ウま

かしさきのは古イニシハの家持ヤカモチの卿キヤウの詠ナガ
 ぬまで思オモひ出デでられて拍子合ハスの梅ウメ花ハナ今イマ
 盛シメりナリ難ナニ波ハの海ウミおオしシてテるル宮ミヤ
 にニ聞キくクぬヌすスあアくク今イマのノ花ハナいイまマだ
 含フみミてテ梅ウメのノ盛シメりナリにニてテ下カ
シテ女あアうウ今イマのノ歌ウタをヲばバあアぢチ真マコトの
呼掛まマにニ吟ギンじジをヲせセ給キひヒゆユぬヌぞゾ不フキ

思オモひヒやヤあアかカのノ歌ウタのノ萬マン葉エフ集シユにニあアり
 つツとトたタいイそのノまマにニ口クチずズさサひヒにニ
アヤマリ誤アヤマリあアりリやヤ是コノ東トウなナ シメテむムもモ今イマのノ冊サツ
シ子シにニいイさサあアんンめメれレどドこコのノ歌ウタのノ家ヤカ持モチ
 のノ卿キヤウいイまマだダ兵ヘイ部ブのノ輔ソあアりリしシ時トキ。
オホヤケ公オホヤケ事コトにニてテ此コノのノ國クニよヨまマせセしシ程ケ二ニ
ラギ月ラギのノ十ジュウまマりリ三サン日ニチ詠ヨみミ終シュウへヘりリきキてテ

三月の三日に。あめりー甲花の始
に。来し。われや。あめりー乙。後。に。都へ
行かん。と。春の。始。都。と。出。て。今。暫
し。ます。べ。ま。に。かく。よ。み。終。ひ。か。ば。
かの。二月。の中。の。三日。の。梅。の。花
こそ。盛。り。あ。ら。め。その。上。あ。て
る。宮。に。聞。こ。し。め。す。あ。い。は。は。大

有

三

鷓鴣の天皇の所位に即かせ給
ひし事なれば。かたがた。い。か。で
梅の歌あるべき。げに。理。あり
古の書に。文字の。違。ひ。の。や。あ
れ。ば。よ。く。あ。ま。り。て。か。ら。る。べ。か。り。け
り。さ。そ。さ。て。か。く。ま。で。分。ま。終。み。
御身のいかたふらん。い。や。誰

毎

四

さても理コトワリのまへまに圓マダラるあきん
にどの人の名ナの不用コトナクあらんまが
まづさきの御言ミコトコト茶チの末マタに花ハナい
まだ含フみて梅ウメの盛シつと宣ノボひま。
梅ウメの盛シつる花ハナならすや 那ナまこと
にこれも謬アヤマリなり。行ユキの花ハナともこれ
のみにしてふ花ハナとのみよあど異コト花ハナ

と。あらべてりよは梅ウメとのみ花ハナと
りよなる古言コトのいかでその跡アト荒アラ
磯イソ海ウミ 償シテの真マ砂サのよみぬとも。
歌ウタの言コト茶チの数カズきは 人ヒトの心ココロと
種タネとして。詠ユイみ出デづるなるもの
からに 心ココロも盡ツキまされあさり
ながら 拍子ウチ合アヒうらやすの安やすま神カミ代ト

○小謡

毎

七

の傳へんとて。安き神代の傳へんとて。
まうけでよみ出づる教の道直
あれべこそ鬼神とも和むく
あれいかでさる。傳へる古教のあ
るべき。聞けはいよいよ著るま教
の理味綿四手の神のふりか
ありがたや。神かといぬうたてをか

あき天少女たぐは風子経彼江
のあしやうもわさへてそ
よと聞えし。恥かや。今かまの
みな色み井の。深ま心の底ひか
く。聞かまくほしや。非もあらば
此の木の本に下伏して侍たせ
給う。夜もすがら月の影もさ

三上人
待詠

出でて。朧あがらも慰めん。梅の陰
に。入る。とんえ。て。跡も。忍え。ず。安。り。に。
けり。跡。も。見。せ。ず。安。り。に。けり。う。
春の。夜。の。月。待。ち。か。て。の。枕。さ。へ。
月。待。ち。か。て。の。枕。さ。へ。取。り。あ。入。ず。
ま。く。衣。手。に。移。る。そ。の。音。の。隠。れ。
あ。ま。の。闇。に。も。志。る。ま。木。陰。か。あ。闇。

後三梅精
一声
拍子合文

は。も。梅。の。木。陰。か。な。
月。う。つ。る。程。波。の。海。の。夜。の。波。心。
も。ゆ。た。か。面。白。や。い。か。に。客。人。こ。の。
夜。ら。の。空。も。い。し。よ。う。う。暗。れ。わ。た。り。
月。の。光。も。晝。な。り。て。花。の。埃。も。
あ。ら。な。ら。ん。人。に。あ。傳。ら。し。給。ひ。
そ。と。い。か。に。あ。り。し。女。の。顔。

毎

ばせあがら。錦の衣玉。霞かゝる姿。
の木の花の精も。今のおもほえず。
^{シテ}おろしめさね。御理。固より梅の
精あれば。たゞその折に。後ひて定
まる姿も。あらぬ上。舞とかあそ
慰めん。とかく。反題。れ来りたり。
^ワまづまづ。かゝる。さる。な。がら。かたへに

人の影も。あ。琴。笛。鼓。の。誰。や。せん。
^{シテ}矢に。ます。神のお。ま。その。風。の。また。
^{カレ上}松の。小枝。の。環。と。調。め。江。の。蘆。の。
^{シテ}笛。と。吹。き。岸。お。つ。波。の。霞。後。槽。
の。音。お。の。つ。か。ら。なる。もの。音。
神。さ。ぶ。る。この。浦。の。昔。と。返。す。袖。
あ。ら。ぬ。甲。くり。上。お。も。ろ。も。神。代。の。あ。ら。ぬ。

毎

○サレ由独吟
○切迄雜子

一。尊と賤み木と貴む。その木の
中にかはかりの形色香の花をけ
れへ梅花とよみし木の花と又
り。○サレ由梅の名のさる花の。咲き
出るのみかりる。うき葉の實さ
へ結びつ。木の肌妙に木立ちまで
異木に勝れく。つけられむ。引ま

○仕舞

てよ言と通かせて梅のその名
をゆりたるあり。○サレ由其の上神事
の所先に立たす宮人には。とらす
るも木のこのすへえに限る事な
り。また浄佛の所教にも。行はな
か。あらず梅のすへえとこれよとぞ。
天皇の大儀の所。場にも。玉殿の

毎

舎人等カ梅のずかえと捧げつつ
雲の蓋の頭に仕んなれるは何の所か
先と拂ふようにしてやかて神代
のつたへありウシテ上下不イ
の卯子の舞の臺の飾らひに梅の
と柳をと立てららるさとて木綿花の
古もてはやせしもこの花とここ

人にんまほく思ひて作りそ
めにけんぶ毎年の大嘗に引たカ
ま小忌の人等も昔の髻草の心を
せホの花のホと冠の中子に
係へ立て久方の天の日陰のかつらら
垂黒酒白酒の神酒たらべ千代え
萬代も限らとと諷ひ舞みそのの

君カ仲のたきへよ是らどおたぞ
久に天地のたき久に天地の共
に栄えよのなんめてたさよ。

仲光

新物ノ五

多田満仲、其子美女丸を寺に上せて學問させけるに、學問は素より經讀む
わざも知らざるを大に怒り、家臣仲光に命じて首を打たしめんとせり。
仲光忍びかね、其子幸壽の言ふがまゝに之を身代りに首打ちて満仲に参
らせしに、美女丸深く悲み、自害せんとせしも止められ一念發心して學問
を勵みけり。

此曲心持緩急少ナカラズ能々考ヘテ謹フコト肝要ナリ
 小書 愁傷之舞

役別	装束	附	季	所
ツレ 多田満仲	風折烏帽子(翁烏帽子ニモ) 着附厚板 單狩衣 白大口 (又ハ指貫ニモ其時ハ込大口) 腰帶 扇 太刀		不	撰津園河邊多字大
子方 美女丸	髪 着附楚箔 長絹 白大口 腰帶 扇		定	村田多郡邊河邊多字大
子方 幸壽丸	着附楚箔 長袴 腰帶 扇		曲柄	菅吉順
シテ 藤原仲光	士烏帽子 着附無色厚板 拭直垂 白大口 腰帶 小刀 扇		四番目(略二番目)	準高 等ノ部
ワキ 惠心僧部	角帽子 着附小格子 水衣 腰帶 扇 珠数			

仲光

作者不詳

シテ仲光^{用カニ} 引^カれ^{ミツ}の多田の備仲^{用カニ}に仕^{ツカ}入^カす。藤原
 の仲光^{ナカミツ}と申^カす者^{ミツ}は^カそ^カも^カ 氣^カヲ^カカ^カへ
 御子^{オン}美女^{ビメ}法^ゴ前^{ゼン}の^{用カニ}あ^カたり^カ返^カま^カい^カ仲^{ナカ}
 山^{ヤマ}寺^{テラ}に^カ登^カせ^カあ^カかれ^カの^カ所^カに^カ学^{ガク}問^{モン}を^カば
 御心^{オン}に^カ入^カれ^カ給^カつ^カす。明^{アカ}考^ケ武^ブ勇^{ユウ}を^カ
 御^{オン}嗜^シみ^カの^カ由^ユ聞^キし^カ召^メさ^カれ^カ次^ジの^カ外^{ホカ}

の御憤りにて某に残りより御
 供中せとの御事にての程に今白
 中山寺へ集りて大女は前を御供中
 し。只今に所へ集りて依いかよ申し
 上げの美女は前を御供申しての
 いかは美女。ス〜寺より呼び下
 さるる。学問能くせよと成りまら

ツし満仲
カマツチ確カリ

と元ラカハ

まつ御経聴聞せんと。崇擅の机
 に金泥の御経。それぐれ讀誦し給
 へ。美女が前にてそご一進きたる
 美女の父はの作に付けても。佳む
 かひもあま。佛音山平習ふ事も
 あかり。あは。ま。てや御経の二
 字とだに。讀まぶ。り。け。れ。ば。今。更。に

子方美女カ上
ヨワクハバ
拍子三合ハバ

へ。美女が前にてそご一進きたる

仕光

後に^ニ個^ハぶ^ハかり^ニあり[。] 満仲内カケテ確カリ げ^ハに^ハげ^ハみ

満仲^ハか^ハ子^ハあれ^ハ一^ハ寺^ハの^ハ賞^ハ覧^ハ際^ハと[。] 連ンデ

得^ズ。街^ハ經^ハ讀^マぬ^ハ理^ハあれ[。] コトワリ ぎ^テ

歌^ハの^ハ 美女サラリ 詠^ハみ^ハえ^ズす^ハの[。] 満仲カケテ 管^ハ絃^ハの[。] カル上上ヨク 手強ク

と^モり^ハぬ^ハ口^ハあ^ハの[。] 上ヨク 式^ハの^ハた^ハが^ハ為[。] 拍子合

な^レば^ハ父^ハが^ハさ^ハも^ハに^ハ云^ハひ^ハ事^ハに[。] ト

跡^ハと^ハ付^ハけ^ハぬ^ハ庭^ハの^ハ雪^ハ人^ハに^ハ見^ハせん[。] キ切

○小謡

あ^ハに^ハか^ハり^ハか^ハ子^ハと^ハり^ハよ^ハか^ハひ^ハも^ハな^ハか^ハる[。] ヨスル

べ^ハと^ハと^ハて^ハ御^ハ佩^ハか^ハと^ハ取^ハり^ハ移^ハ入^ハる[。] ヨスル

り^ハい^ハづ^ハる^ハや^ハ仲^ハ光^ハか^ハ中^ハに^ハて^ハ免^ハ角^ハ御[。] ヨスル

袖^ハに^ハ取^ハり^ハつ^ハま^ハす^ハか^ハり^ハ申^ハし^ハつ^ハ危[。] ヨスル

美^ハ女^ハの^ハ前^ハの^ハ御^ハ身^ハの^ハ程^ハぞ^ハいた^ハは[。] ヨスル

一^ハき[。] 満仲内カケテ確カリ いか^ハに^ハ仲^ハ光^ハ心^ハと^ハ静^ハめて^ハ聞[。]

ま^ハら^ハ子^ハ供^ハと^ハ寺^ハへ^ハ登^ハせ^ハ並^ハく^ハは^ハ学[。] ガク

三

三

向のたぬにてこそゆへ。明^{アカ}堂^{ドウ}武^ブ勇^{ユウ}と
 嗜^シま^シん^ナに^カの^ノ寺^テに^シ墨^シま^シて^テの^ノか^ハひ^ハ
 何^ニ事^シぞ^シ法^{ホウ}徒^トを^シて^テゆ^ハさ^リあ^らら^ず
 折^セ々^々の^ノ石^シ折^セ檻^{カン}にてこそゆへまづ
 御^{オン}佩^{ハイ}力^{リキ}と^シた^シま^シつ^リゆへ^ハ可^カ禪^{ゼン}灸^{キウ}女^{ニョ}
 と^シ討^ツつ^テま^りゆへ^ハお^なま^しる^もの^あら^ず
 へ。明^{アカ}神^{カミ}氏^ヂの^ノ神^{カミ}も^シ法^{ホウ}知^チ見^ミあ^れ仲^{ナカ}
 満^{マン}仲^{チュウ}カ^カツ^ツテ^テ確^{カク}カ^リリ

光^{ミツ}と^シて^テ其^ノ修^{シュ}ま^しる^もの^あら^ず
 何^ニ事^シも^シ法^{ホウ}徒^トと^シば^バお^なま^しる^も申^{マウ}す^ま
 一^{ヒト}く^ク修^{シュ}ま^しる^もの^あら^ず御^{オン}今^{イマ}の^ノゆへ^ハ
 言^{コト}借^カ道^{ドウ}新^{シン}の^ノ外^ホの^ノ御^{オン}怒^イに^シ
 て^テゆ^ハ御^{オン}叱^シり^ハあ^らず^もの^あら^ずは^ハあ^らず^もの^あら^ず
 も^シが^シ程^{テイ}迄^キの^ノ存^{ゾン}せ^ずゆ^へに^シや^ハい^ハ何^ニと^シ
 作^サせ^しゆ^も一^{ヒト}ま^づの^ノ落^オし^申す^まら^ずや

と好じゆいかに申しよる。只今の餘
 りの御怒にて。某も迷惑仕りて
 いか^{美女}に仲光。只今自^{ミツカラ}を逃^{ニガ}了つるは。
 仲光が制^{セイ}するはよかり。美女を付
 つて柔らせよと怒^{イカ}り給ふと。われ
 物^{モノ}部^ゴに聞^クき一なり。もや自^{ミツカラ}が首^{シラビ}と
 取^トり。又此の御目^メに掛^カけ久^シげ^ニお

げに健^{ケン}氣^キなる事と作^サせゆ物か
 所^{シヨ}詮^{セン}何^ニと作^サせゆとも。一まづ落^オし
 申^{マウ}さす^スはてふ。や行^イと申^{マウ}すぞ。
 又御使^{オシ}のた^タちたると申^{マウ}すか^カあら
 矣^イ止^トや。さて行^イと仕^シりゆ^ユべき^キ。けにや
 何^ニ事^シも報^{ホウ}ありけ^ケる^ル。浮^ウ世^セか^カな^ナ傳^{デン}へ
 聞^ク阿^ア闍^{ヤク}世^セ太^{タイ}子^シの頻^{ヒン}婆^バ婆^バ羅^ラと害^{ガイ}

○小謡

美女サワリ

セすや。これ皆宿縁カノ上 用カニの如し。

過去シテにてなせ。現世用カニに徳ヤカて報上 用カニの

人の咎トガあらじ。只自ミヅカラシカなすところを

愚オロカにや恨ウラミみある。浮世ウキヨの守モリと思オモひ

らん。たかひヤラカよりき事コトを。語り語カガヒれ

ハ時トキ移シる。わや首ウタとれや仲ナカ光ヒと。言コト

の葉ハも候ウケもすむシてそ悲カナシかりけ

れ。あはれ某御年シテの程ハジにてゆつ

御命イノチに依ヨりゆかんカずるものカと惜オソか

らぬ命イノチもこそカによりて心ココロにほせぬ口クチ

と。さる候ウケいかにチ及ウ上ウヘ。只今イマの御

を榮サカてそ。幸サイ壽シユが耳ミミに留トマりてゆへ

早ハヤ自ミヅカラシカ首ウタと取トルり。美女ウツクシの翁オビと仰オノせぬ

ひて。主君シユンの御目ミに掛カけられゆへ

中七

六

争み命の際幸壽幸壽もすすみ美女美
女も立ちよる幸壽かまたの玉君シテ汎方
の思ひ子美女申にてあかなかシテ仲光カ
身上のこれ程に惜しからし行とカせま
しとやあらんとト猛ま心にも弱り弱
果たる氣色か甲美女上サレ親にだに惜ま
れぬ身と行とたぐかく思みらん。

あかなかの情のつらさいかあらん幸壽
情の人の為ならし今時の際の御
命イニに依り申さずの弓矢の家の名
ぞとよき甲上上のサカカたけ方も切ま御身元
ふだも理の或のおま子の心をし
玉君をといかで手にかけんと心弱
しや白真ろゆん手にあるの神カ

子コどトしシ。思オモひヒ切キりリつツ。親オヤ心ココロのノ衛ウ討チにニ
現マあアきキ種シがガ子コとト夢ユメとトなナりリにニけケりリ
我ワがガ子コとト夢ユメとトなナりリにニけケりリ
げゲにニ汝ニがガ申マすス如カくク。某ナニがガ心ココロ中ナカ察サツしシゆユへヘ。
又マタ美ミ女メ法ホウ前ゼンとト御オノ供ケ申マしシ。何ナニ方カタへヘも
立ち退タチノドきキゆユへヘ。女メ前ゼンをヲ付ツらラなナりリてテ依ヨりリくクも
女メ前ゼンをヲ付ツらラなナりリてテ依ヨりリくクも

供ツカりリたタるルものノかカなナ。そソこコぞゾ最サイ期キのノ
未ミ練レンふフあアりリつツらラんンかカ。いイやヤさサるル所ショ産サン
あアくクゆユ某ナニ太タイ刀トウ拔ヒきキ持モつツてテかカしシたタあア
らラひヒゆユとトころコロふフ。やヤあアいイかカよヨ仲ナカ光ミツおオ
くれクたタるルかカとト。これコレをヲ最サイ終シュウのノ御オノ言コト
葉エフよヨてテゆユいイかカはハ仲ナカ光ミツ。おオこコとトなナじジ
のノ如カくク。物モノアアりリてテ美ミ女メなナらラずズてテ子コとト云イハふフ

美^ミ女^メ花^ハも^も。種^{タネ}カ^カ子^コの^ノ如^{ごと}く^く手^テ馴^なれ
 一^{ヒト}お^お二^ニ人^ニの^ノ者^{モノ}に^ニ別^{わか}る^る思^{おも}ひ^ひ 向中用カ
 王^{オウ}出^で子^し信^{しん}む^む習^{じゆ}。命^{いのち}の^ノ流^{なが}も^も遠^{とほ}れ^ぬ
 ぞと^と仲^な光^{みつ}と^と ト用九心
 上^{うへ}月^{つき}用^{よう}カ^カ ト用九心
 げ^げに^にや^や親^{おや}子^この^ノ道^{みち}あ^あれ^ば
 げ^げに^にや^や親^{おや}子^この^ノ道^{みち}あ^あれ^ば
 又^{また}思^{おも}ひ^ひ子^この^ノ跡^{あと}と^と法^{はふ}の^ノ ト用九心
 業^{わざ}と^と營^いみ^み

満^{まん}仲^{ちゆう} 中用カ
 心^{こころ}強^{つよ}く^く ト用九心
 女^メ花^ハも^も。種^{タネ}カ^カ子^コの^ノ如^{ごと}く^く手^テ馴^なれ
 一^{ヒト}お^お二^ニ人^ニの^ノ者^{モノ}に^ニ別^{わか}る^る思^{おも}ひ^ひ 向中用カ
 王^{オウ}出^で子^し信^{しん}む^む習^{じゆ}。命^{いのち}の^ノ流^{なが}も^も遠^{とほ}れ^ぬ
 ぞと^と仲^な光^{みつ}と^と ト用九心
 上^{うへ}月^{つき}用^{よう}カ^カ ト用九心
 げ^げに^にや^や親^{おや}子^この^ノ道^{みち}あ^あれ^ば
 げ^げに^にや^や親^{おや}子^この^ノ道^{みち}あ^あれ^ば
 又^{また}思^{おも}ひ^ひ子^この^ノ跡^{あと}と^と法^{はふ}の^ノ ト用九心
 業^{わざ}と^と營^いみ^み

美事御の候不非ず。美女御前の
 御事御とやさうんためは事りての
満仲カッテ
 その事にての餘りに不思議の者
 きての程は。仲光に申し付け失ひ
 てるワキその御事にての困カニ御心と
 しづめて聞カさされぬ。美女御前を
 失ひ申せとの御使頻シキりありしに仲

光にお思ひまう。いかに三世の主君を
 手にかけ申すまこと思ひ。秋か子の
 幸壽が首と切り。美女と申して御目
 みかけてる。されば秋か子に代へて思
 み程の美女御前の所不審免し
 おつませ拍子合ハル上、困カニと引ま具一備
 仲の御前よこそ事りけれ満仲カッテ

へこそあはれ未練なる美女ありけり。
 幸壽と教さぶ徳をよなごらや自害
 に及ぶごらる。 ワキカシテ いかや徳事とさ
 置きて。幸壽が佛事と思
 る。美女を助けたび終入と
 涙と流し申しけれむ カニ上 猛ま心
 もよわよわと早歎きとやしけ

甲 仲光餘りの嫉しきた。御盃
 や菊の酒。仙家入りし身の七
 世の孫子逢ふ事もたると人あらず
 や親と子の世の契の二度逢
 ふぞ嫉しき ウ 親子鶴鳩の盃の
 舞え ウ 酒宴かな ウ いかよ
 仲光。芽出度き折あれ一指御

シテワカ上

舞マユひのへヘ舞マユえエのノ酒サケ宴ウチかカあア男オトコ舞マユ

鴛ウヰ鴦ウヰのノ友トモあアまマ水ミヅ子コ浮ウキまマ志シつツみミ上ウヘ

上日ウヘヒ雨アメカミ

下シタ安ヤスかカらラぬヌ思オモひヒこコそソあアれレあアはハ

れレやヤげゲよヨ秋アキかカ子コのノ幸サイ壽シユがガあアるルあア

らラべベ美ミ女メ所トコロ前マエとト相アイ舞マユせセよヨせセ仲ナカ

光ヒカリ手テ拍ヒッパツ子コ雜ザツしシ只ただ今イマのノ涙ナミダとト感カン

涙ナミダとト思オモひヒいイかカのノ嫉ヤミしシかカるルべベまマ

○独吟
上日ウヘヒ雨アメカミ

思オモひヒのノ涙ナミダ余オノ前マエ目メのノ舞マユのノ手テ交カるル友トモ

袖スリーブのノ上ウヘ露ツルギもモ下シタ露ツルギもモおオくクれレ先サキだダつツ

浮ウキ世ヨのノ習ナリ白シラのノ歎ナガメまマ今イマ日ヒのノ悦ユキひヒ

のノ都ミヤコにニ帰カエるルまマでデあアりリとト惠メ心ココロのノ僧ソウ

顔オモテのノ美ミ女メとト伴トモひヒ帰カエりリけケれレべベ仲ナカ光ヒカリ

もモ遠トホかカよヨ脇ワキ輿ウよヨ美ミありリこコのノ度タビのノばバ

不フ審シン人ヒト為ナリよヨあアらラすスかカまマひヒてテ手テ習ナリ

中七

上七

学ガク問モンねんニどろニよニおヒつニまセとニ御ミ暇ヒヤ
 申マシてテ歸キりリけケるルガニ。吾ワ想ソウやニ幸サイ壽シユカニ
 御ミ供ツケあラらバとニ暫シヤウしニのニ興キョウとニ見ミ送ソウ
 りリ申マシ暫シヤウしニのニ興キョウとニ見ミ送ソウりリ申マシ
 てテ。ちチらニとトれレてテぞゾ留トモまりリけケるル。

何れ

十四

高野物狂 新物ノ奇

常陸國平松家に仕ふる高師の四郎といへる者、幼主春満の遁世したるを悲
 み、其遺しおける文を抱きて物狂となり、紀伊の高野山に到りしに、は
 らずも幼主の此山に籠り居たるに會ひ、互に名乗り明して再會を喜び、
 誘ひて故郷に立ち歸りけり。

此曲前、閑カニシツトリトシタル心持後、淀ミナク節扱ヒニ心シテ謡フベシ

役別	装束	附	季	所
前シテ 高師四郎	着附殿敷斗目 素袍上下 小刀 扇	珠数持	不	前 常陸 伊國 伊紀 後
子 方 平松春満	着附縫箔 稚兒袴 扇		定	國、陸常 前
ワ キ 高野山僧	角帽子 着附殿敷斗目 白大口 水衣 腰帶 扇 珠数 (又ハ着流シ僧ニモ)		曲柄	山 野 高 郡 都 伊 國 伊 紀
ワキツレテ 從 僧	角帽子 着附無地殿敷斗目 白大口 水衣 腰帶 扇 珠数 (又ハ着流シ僧ニモ)		四 目 番 (略 二 番 目)	準 高 等 部
後シテ 高師四郎	侍烏帽子 着附殿敷斗目 白大口 懸素袍 腰帶 扇指 文竹ニ挟ミ持			

高野物語

作者不詳

ニテ男河 用ガニ重シモリ

此れハ常陸の國の住人平松殿に仕
 へ申す。高師の四郎ト云ハす者にて
 此ノモノも頼み奉る平松殿の去年の
 秋空しくあらせ給ひてハ又春滿殿
 と申しては子息の由度ハガハまだ
 幼くまゝますにや。暮にもりたて

申せよの由遺言にてゆ程に片時も

離れず春満殿ともりたてや

しゆ又今春日平松殿の法忌日にて

由向御寺にまらばやとありゆ

昔在靈山名法華今在西方名阿

彌陀安樂示現親世音三世利益因

一射けふ有難き悲教かあ

○小謠

サモ上 用カニ重シモリ抑メニ
ヨワク 拍子合ハス

一射けふ有難き。悲教かあ。○慈眼

親衆生悉く。慈眼親衆生悉く。誓

音まの日の影の目雲りあまの世の御惠。

後の世かけて。頼むあり後の世かけ

て頼むあり。○春満殿の御文にてゆ

に候ゆ。あら思ひ寄らざるや。まま

づ御文と云うするにてゆ。まれ受け

かたき入身を受け。逢ひかたき如来

の教法に逢ふ事。闇夜の燈後の
 舟待ちら得たる心地してわれと見え
 ん夢の世に今を捨てずの徒らに
 又三途にも廻らん事。歎きても
 あは餘りあり。此の生にこの身を
 保へずはいつの時とかが頼むべき
 一子出家すれば七世の父

母成佛すといへり。この身を捨て
 て空鳥に入らば別れし父母の
 御事のみか。生々の親を助けん
 事。これに如か。と。思ひ切りつ
 家を出て修行の道に赴くなり。
 父母に別れしその後。たおと
 とそひたすらに父とも母とも

頼みつれかくとも申さずて別る
 事。乳房の恩の父母に二度別
 る心地して。名残こそ惜しう
 俵へかまひて素ね終みあふ三年
 内には必ずかならず身の行く
 へとも知らせし墨衣思ひ立て
 ども流石世と出づる名残の袖の

○小謡

ぬれけり。書き残されし言の
 葉の若木の花と先立てし身の
 なる果ていかあらん恨めしの御
 事や。恨めしの御事や。たらひと
 を捨て終みとも三世の契あるも
 のと。行くまでも御供よ。あどや俵
 ひ終めぬぞ。今うの教り行く。花身の

高野抄

日

彩ニシラむ木コ陰カミも嵐カミ吹フく。行イくへスやハらフ。
ちチ雲クモ水ミヅの跡アトと暮クひヒてテいイづヅとト
もモ知チらラぬヌ道ミチよヨぞゾ出デでデにニけケるル。
らぬ道ミチよヨぞゾ出デでデにニけケるル。中入

ワキ僧
次オレ上

憂ウレまマのノ夢ユメもモ覚サめメぬヌべベ。憂ウレまマ
その夢ユメもモ覚サめメぬヌべベ。深フカまマ清スガ法ホウ
と頼タノむムありリ。司ツカサれレはハ高タカ野ノ山ヤマのノ

僧ソウよヨてテ候コト。又マタこれレにニはハ座ザ候コトとトさサあア
きキ人ヒトはハいイづヅくクもモ知チらラずズ終ハシりリ終ハシ
ひヒ。出家シュツカの御ミ堂ドウのノよヨうウにニてテ愚ウ僧ソウ
と御ミ頼タノみミぬヌへヘとトもモもモうウ尋ヒねネるル
人ヒトもモやヤ作スらんンとト。腰ウシがガにニ痛イタタりリ日ヒ
と送オウりリぬヌ。又マタ今イマ日ヒのノ三サン鉢ハチのノ松マツにニ伴トモひヒ
て。慰なぐさめメ申マウさサそソやヤとト存ゾクじジぬヌ

後シテ男上
一声
拍子合ハズ

朗カニ連ヒラツケ

高野村

霞める空に帰る雁の翅に付け
籾武が交。それの故郷の旅衣。君
を忘れぬ心ぞ。か。われも主君の
御行方。うはのや。なる御跡を尋ね
や。逢ふと。遠ざの陸奥紙に書き残
す。交こそ。君の形。えあれ。あら。あ。度

○独吟
○仕舞

つ。あ。の。御。身。の。行。く。へ。わ。あ。呼。子。鳥。翔
誘。は。れ。花。の。行。方。を。尋。ね。つ。
風。狂。ら。る。心。か。な。肌。身。に。係。る。
この交を懐紙と。人。や。ん。ん。朝。も
よ。紀。の。開。越。え。て。名。に。聞。き。紀
の。開。越。え。て。名。に。聞。き。これ。や。言
野。の。山。深。み。茂。み。の。木。陰。分。け。行。け

高野村

べどもも 筑波の山やらんと我が
 たを思ひ出の昔床しき心にもあ
 ほ我が主君哀しやと 又山松の根
 をよ道といざや狂ひよらんいざ
 狂ひよらん 立ちよる雲路の立ち
 上る雲路の 立ちよる 高野山
 来て見れば 尊とやあ 或は念佛

祢名の聲々 或の息 鐘鈴の聲
 耳は 涙み心すみて 物狂の狂ひさ
 むる心や ちいつかさて ちいつかさて 尋
 ぬる人を 道のべの 便の 接折あらば
 ちがが 主君に 逢はざらん ち 懇に
 祈念して 三銘の 松の下 立ち寄り
 りて 休ましん 立ち寄りて 休ま

子方僧白サナリんこれある物程とよくよく見ゆ人
 へ故郷フルサトにてる一使ひし高師タカシの四
 郎とやす者にてゆが。某と尋ねて
 か様カサマに物程とありたるとし思ひゆ
 言コト結道ムスビミチ事コトざらへ御名ミナ告ツケりゆへ
 子方コトカタカケテサナリいや暫サマシく思オモひ子細コササのゆへまづ心
 らぬよしにて言コト被カケてかけては覺サト

ゆへコト得ウケ中ナカし依ヨ不思議ヒナギトやあ姿
 を見れば異形ヒナガタある有様アリサマありこの言コト
 野ノの内ウチへ叶カナひゆま。人ヒトよとがめ
 られぬ先サキにさうとさう出デてゆへ
 シテ用ヨウカミこれの御利益ミケリキともあまの作ツクかあ人
 と尋ねてこの山ヤマに尋タシると。たゞ席セキれ
 と反情オモヒあやチかチる結果ケツケ清浄シヨウジョウの

地よ入り定まれる高野の山と。席ハシ
 出でよの正説教中ニノ崩ス入心得すこそ久ウツミナ
 年ワケトにささまる言早知察あり早知げほもシテウケテ
 げあも入定とやす事ニラヂキヤの憚多ハシガシま
 言察コトやらん去りあからかく安と
 遁れ身と捨て。山に入るの須義

あらずやワキササリこそのおことワキササリの壽
 ねずわれこそその身と捨人かシテカエテいわ
 事ある主君も捨人あれ出家の
 御依カル上りさんためわれも憂ユき身と
 捨人ありワキササリわうの出家の望シテウケテあら
 べ何とそ様とシテウケテつかへシテウケテごと
 めぬこそ發心シテウケテ初縁シテウケテの形ワキササリあれシテウケテ

發心初縁あらば人佛不二の道の如
 けりや シテウケテ 事新ま作かまゝも大
 師の御身の内心三昧目前ありこれぞ
 正しく人佛不二 ワキカケテ あみ殊勝あ
 りげにも大師の生ありあから生
 死涅槃に シテ用カニ 入り定まれる高野の真
 今この山にまのあたり シテ人用カニ 昔薩埵の

〇サ由独吟
 百里程人家をと離れて ウツ 無人聲 シテ用カニ され
 高野山と申すの帝都と去つて二
 野山にまのあたり 甲より地上 あり 拍子合ハス この
 われの三世の如き忍と尋ねてこの高
 大師の侍ら終みの 上 意尊三會の曉 拍子合
 ち終み事人佛不二の妙躰あり
 不明と授かり イハシ 意氏の下生と侍

だま^ま世^よの^の隠^{カクレ}所^{ところ}として^{して}結^{むす}東^{あづま}の^の清^{きよ}浄^{じやう}
 の^の道^{みち}場^ばたり^り。中^{ちゆう}には^はも^もこの^{この}三^{さん}鉦^{しやう}の^の松^{まつ}
 の^の大^{だい}同^{どう}二^に年^{ねん}の^の山^{やま}歸^{かへり}朝^{あさ}以^{もつ}前^{まへ}よ。我^{われ}が
 法^{はふ}成^{せい}乾^{けん}園^{えん}滿^{まん}の^の地^ぢの^の能^{のう}に^に踞^{すま}り^り留^{とど}ま
 れ^れと^とて。三^{さん}鉦^{しやう}と^とあ^あげ^げさ^させ^せ給^{たま}ひ^ひし^しに。
 老^{らう}と^とも^もに^にあ^あび^びま^またり^り。この^{この}松^{まつ}の^の
 梢^{しやう}も^も留^{とど}ま^まれる^る。そ^そも^もそ^そも^も諸^{しよ}本^{ほん}の^の守^{まも}

へ^へわ^わま^まて^て松^{まつ}も^も留^{とど}ま^まる^る。そ^その^のた^ため^めよ。千^ち
 代^ち系^{けい}代^{だい}の^の末^{すえ}か^かけ^けて。ス^すく^くか^かれ^れと^との^の
 山^{やま}の^の影^{かげ}を^を委^{あづか}り^りく^く舊^{ふる}紀^きよ^よの^のせ^せら^られ^れたり^り
 拍子^{ウチノミ}三^{さん}合^{ごう}クセ^{クセ}下^{した}用^{もち}カ^カ伸^{のび}ビ^ビリ^リ
 引^ひかれ^れば^ばは^はや^や真^ま如^に平^{へい}等^{とう}の^の松^{まつ}風^{かぜ}は^は八^{はち}
 葉^はの^の峯^ねを^をと^と。靜^{しやう}か^かは^は次^{つぎ}き^き渡^{わた}り^り。法^{はふ}性^{じやう}
 随^{ずい}縁^{えん}の^の月^{つき}の^の影^{かげ}の^の八^{はち}つ^つの^の谷^やに^に曇^{くも}ら
 す^すし^して^て滅^{めつ}は^は三^{さん}會^{かい}の^の曉^{あけぼの}と^と侍^{しやう}つ^つ如^{ごと}く

身ミのミさミそミこミそミ即ツ身ミ成ル佛ノのミ相ヲと
 顯ハ入ル身ノのミ地ヲとハ新シつク深クなる
 奥ノのミ院ノ深ク山ノ鳥ノのミ聲ヲ澄ミてハ飛
 花ノ落キ葉ノのミ声ヲまデ母ヲ常ニ観念とス
 すムむルこれヲとモ又ハ常ニ住スのミ皆ハ自ラ念ヲ
 佛ノ道ノ縁ノ覺ノのミよクとモあカすハありシ
 現レバハ時ヲ移リ事ヲ去リてハ四ノ季ヲ折ル

々ノのミおノのミづカらハ光ヲ陰ヲ惜ムべシ時ノ人ノ
 とモまたハさラるニ貴ク賤ク群ヲ集メのミ雲ノ霞ノ
 かクるニ野ノのミ山ノ高クみテ各ノ處ノのミ風ノ常ニ
 樂ノのミ夢ヲさメ法ノのミ稱名妙ノ音ノのミ心ノ
 耳ニ残リ充チ満チてハ唱ヘ行キみ聞
 法ノのミ聲ノのミ高ク野ノにテ靜カあル靈ノ
 地ノありけりハ尋ね来ル中ノ舞ヲ

拍子入

中舞

シテ方上朗ラカニ

震シテ中用カニの奥ノの高野カやまノ時トも春ノ

花壇ハナノ上ノ花壇ハナノ上月ツキ傳ツ法ツ院ツ紅ベニ茶チ三ノ

実ニ院ノよりモもモあハ深ク雪ハ奥ノ

院ノかれヨリもモこれヨリもモいツもモ

常ニ盤ノのノ三ノ銘ノのノ松ノ陰ノよリ立チよリ春ノ

のノ風ノ狂ヒたル物ノ狂ヒ物ノ狂ヒあラ

かれヤ高ノ野ノのノ内ニてテ高ノ野ノ

内ニてテのノ儀ノ狂ヒはハぬハ制ト戒トとシ忘レ
てテ狂ヒたリ。ゆルさセ終ニ入リ御ノ聖ノゆル
るサをセ終ニ入リ御ノ聖ノわハあハいハかハあレ
あるハ高ノ師ノのノ四ノ郎ノにテのノあハまハかハ何レ
とシてテこれマでテ来リたルぞトわハあハ
れハまハしマすハのノ春ノ備ノ殿ノにテのノ座ノ
のノかハ行クとシてテこれマでテ来レるハはハあハ

ら情^{ナカケ}あ^の御言^{オン}な^や。後^{キトヒ}御身^{ミミ}を^捨
 て^捨み^{とも}も。い^かで^か捨^てき^せす
 べ^ま。御心^{オン}を^静め^て。聞^きめ^せ。平松^{ヒラマツ}
 の^流名^な字^じを^誰か^つが^せ。捨^みらん。
 ま^づこの^度の^御歸^りあ^つて^さて
 其^の後^のも^かく^も。清^き意^いを^あど
 か^背か^んと^上御^{サガリ}袖^{そで}に^取り^つま^て。

三^ニ世^ノの^契朽^くち^せね^ば。これ^まで^尋ね
 紀^ノの^國や^中野^ノの^山の^陰賴^む主^君
 へ^逢み^ぞ。嬉^まし^き。か^くあ^るべ^き。又^あ
 ら^ざれ^ば。高^か野^のの^山と^立ち^出て^も。
 か^たり^あぐ^さめ^ぬ。郷^ノ又^御供^{ツケ}申^し
 歸^りつ^つも^もに^行ま^さる^えけ^り。これ^も
 も^清法^をと^ひろ^めに^し。大^師の^惠あ^り

けりや大師の恵ありけり

菊慈童

概説

新物ノ七

唐土鄜縣山より薬の水流れ出づる由聞きけるにより、其の源を見て参れとの勅命を受けたる臣下、到り見るに一つの庵在りて内より怪しの童子現れ出でければ、言葉をかけて種々問答の末、此の童子は昔穆王の頃の者にて、王より御枕に二句の偈を書きて賜はりしかば、之を菊の葉に書きおきしに、其の葉の露のたまり流れ落ちて薬となりぬるを飲みしに、其の水不老不死の靈薬となり、茲に七百歳を送りたる由を知りぬ、童子はそれより遊舞し、菊をかきわけて仙家に隠れ入りけり。

此曲清クサラリト謡フベシ

シテ	ワ	ワ	役別
慈童	魏文帝勅使	唐冠 金地鉢卷 着附厚板 白大口 袷符衣	東附
同従者	洞烏帽子 着附厚板 白大口 狩衣 腰帶 扇	唐冠 金地鉢卷 着附厚板 白大口 袷符衣	
面慈童又ハ童子 黒頭 金地鉢卷 着附厚板 法被又ハ唐織坪折 半切 腰帶 菊葉團扇			
曲柄	月	九	季
能弱略目番四	山	縣	支
級五	山	縣	支

菊慈童

作者不詳

ワキ勅使
ツヨクニ人
次亦上
拍子ニ合

ワキ内
朗カニ確カリ

ハカカハ

山より山の奥までも山より山の
奥までも道あるや時代あるらん
これの魏の文帝には奉る臣下あり。
さそもわが君の宣旨にの鄴縣山の
麓より薬の水備き出でたりその
水上とてふれとの宣旨と家り。

只今山路シも起オモムきのゆヒ急ヒラカハぎの程ハにこれ
 へちや鄜縣山シに暮オモムまいてゆヒこれハ庵イホリ
 のんえてゆヒまづ此コのあたりハに徘徊ウロイ
 事コトの子細コトと窺ウカガわやハしなむじゆ
シテ慈童 用カニ朗カニ
サシ上
ヨウク
拍子三合ハス
 引ヒれ邯鄲カンの枕マの夢ユメ。樂タカシむ事コト百ヒ
トセ
トセ
トセ
 年トセ慈童ヒが枕マの古コの思オモひハ寢ネあハれバ
ト
ト
ト
 目メもあハはハずハ夢ユメもあハはハずハ一ヒつヒ樂タカシみハ
拍子三合
上日 用カニ

○小謡

と松マツが根ネのウいつヒ樂タカシみハと松マツが根ネのウ底ソコの
 床トコは寢ネてハ枕マの夢ユメの夜ヨもハすハが
 ら身ミとハしハる袖スエの乾カされハずハ頼タみハにハ
 かハひハてハそハあハけハれハ獨トりハ寢ネの枕マ詞シぞ
元二下
元二下
元二下
 恨ウラある枕マ詞シぞ恨ウラあるハ不フ思シ議ギや
元二下
元二下
元二下
 あハてハの山ヤマ中ナカの虎コ狼ウ野ノ干カンの栢ハシあハるハ
イホリ
イホリ
イホリ
 これハあハる庵イホリのウ内ウチよりハもハ顯ハれハ出デづル

姿と見れば。其の様化^ケしたる人^ニ向^カか
 り。いかある志^シぞ。名^ナと名^ナ告^ツれ。又^{シテ}倫^{カニ}
 通^{カヨ}ぬ可^クあらば。生^シ方^ナとて。そ^レ化^ケ生^シの
 者^ノと^シ中^ニす^べけ^レれ。これ^ハ周^ノの^シ穆^ノ王^ニに^シ召^サ
 仕^ツわれ。慈^ミ孝^コが^カあ^レる^ハ果^ニぞ^トも^シ
 此^ノ不^レ思^ハ議^ノの^シ言^ハひ^ノ事^ヲ。か^ハ真^ニし
 からず^シ周^ノの^シ代^ノ。既^ニは^シ數^ノ代^ノの^シそ^ノの
^{ツカ}
^{ツヨク}
^{拍子ニ合}

かみにて。王位も其の數^{カズ}移^リり^キまぬ
^{シテ}
^用
^{カニ}
 不^レ思^ハ議^ノや^ハわれ^ハそ^ノの^シま^ニは^テて。昨^チ日^ツ
 や^ハ今^チ日^ツと^シ思^ヒひ^シに。次^ニ第^ニに^シ喜^ブる^ハそ^ノの
^{カミ}
^{カツテ}
^{ホク}
^{ワク}
^カ
^ミ
 昔^ノと^シ今^ノと^シ移^リ王^ノの^シ位^ノい^カに。今^チ魏^ノ
 の^シ文^ノ帝^ノ前^ノ後^ノの^シ同^ノ七^ノ百^ノ年^ニに^シ及^ビひ^タ
 り。非^レ想^ハ非^レ想^ハの^シ知^ラず^シ人^ノ向^カに^シ於^テ
 今^チま^ニで^シ生^ケる^ハ者^ハあ^ラず^シ。い^カさ^ニま^ニ

生の者やらんと。牙の怪めをそお
 へけるシテ用カニいやはなほもそ方こそ化
 生の者たるやすべけれカカ亦くも所門
 の御枕に二句の偈と書まの添賜り
 たり。まぢり寄り枕をとば負せよ
早カニ上これの不思議の事なりと。各々立ち
 寄り後みてんれどもシテ用カニ枕の要文カカ疑

○切近雜子

○獨吟
○仕舞

あり中具一切功德慈眼視念生福壽
 海を量具カニ古應頂禮上の妙文と
 菊の葉に墨く滴や露の身の不老
 不死の薬とありて七百歳を送りぬ
 る。汲む人も汲まざるも。延ぶるや千
 年あるらん甲おもしうの遊舞わか樂
 有強の妙文カニわか上。則ちこの文菊の

紫よ。則ちその支菊の葉に悉く顯
る。さればにや。常下も芳しく備りも
自ひ。例ともあるや。各陰の水の可
鄴縣の山の備り。菊水の流。泉の
固より。酒あれば。酌みて。飮めす。ひ
て。施。わが身も。飲むあり。飲むあ
り。や。月の霄の向。その身も。醉ひ。な

引かれて。よろよろ。よろよろ。と。た
よひ。寄りて。枕をと。取り。上げ。戴
き。奉り。げ。み。も。有。難。き。君。の。聖
徳と。岩根の。菊。と。手。折り。使。せ
手。折り。使。せ。敷。妙。の。袖。枕。花。と
造。に。似。たり。けり。固。より。薬
の。酒。あ。れ。ば。固。より。薬。の。酒。あ。れ。ば

Amakusa's text

ト

醉サケひヒほホもモ侵カされレずズそソのノ身ミもモ衰ヤ
らラぬヌ七シ百ヒャク歳サイとト保タちチぬヌるルもモどドのノ御ミ
枕マクラのノ故コあアれレばバいイかカまマもモススーーきキ子コ
秋アキのノ帝ミカド萬マン歳サイのノわワがガ君キミとト祈イノるル意イ
童ワカがガ七シ百ヒャク歳サイとトわワがガ君キミにニ授カけケ墨スミ
きキのノ前マエはハ鄴エ縣ケンのノ山ヤマ路ヂのノ菊キク水ミヅ汲ヒ
めメやヤ掬スべベやヤ飲ユむムとトもモ飲ユむムとト

もモ盡ツクまマいイやヤーーやヤ盡ツクまマいイやヤーーとト菊キク
かカまマいイ分ワけケてテ山ヤマ路ヂのノ仙セン家カにニ其ソノのノ
まマゝゝ意イ童ワカのノ入イりリはハけケりリ。

大典概説

一臣下宣旨を蒙りて平安神宮に詣り、御即位大典の報告をなしけるが、神之を愛でけるにや、奇瑞を示し、天女出で、舞ふと見れば遠に社殿震動して神躰出現し、舞樂を奏して君が代の千秋萬歳をことほぎけり。

シ	ツ	ワ	ワ	役
テ	レ	キ	キ	別
半切	面連面 緋大口	着附無地熨斗目	風折烏帽子 扇	装束
狩衣	天冠 紫地長絹	素袍	着附厚板	束
腰帶	黒垂 色鉢巻	小刀	白大口	附
扇	腰帶 着附摺箔	扇 内一入太刀持ッ	長絹	
			腰帶	季
				所
		曲柄		
		警言		

大典

ワキ勅使
ツヨク
拍子三合

四方の雲霧收まりて四方の
 雲も務收まりて長閑けき日影
 作かん 早約 確カリ
 る臣下あり。さても今度御
 位の大典ましますにようり。奉告
 の宣旨と蒙り。只今平安御宮

大典

へと参向はりの急ぎの程もこれ
 の早神宮も着きての
 宇内は國の多けれど類ひもあれ
 神國の豊葦原の秋津洲天
 人利合三才の徳具つりて天雲の
 向伏す限り谷蟻のさわたる極
 み大君の清後威の志善くして

○小謡

五日の風も十日の雨も時節を
 差へず悠紀主基の清田も穂
 穂とさかせつ。天のこんづも類み
 べま。黒酒白酒も数々の産毛に溢
 るはかりあり。百官郷相雲客
 も千代も八千代と壽きて五節

の舞や種々ののいとも妙ある音
 樂よ。感候肝よ銘上げける。事の
 由とも神前よ。聞え上げんと。
 伏し拜む聞え上げんと。伏し拜む。
 早の確カリ
 われこの宮居み詣てつ。奉告の
 式を終り心と澄ます。折しもあれ
 地上 雨カニ
 不思議や社壇の方よりも。不思議
 不思議や社壇の方よりも。不思議

議や社壇の方よりも。異香薫
 して瑞雲たあびき微妙の音楽
 聞え来て天津少女の舞の袖
 返す返すも面しるや
 上
 玉もゆららに少女子か。玉もゆら
 少女子が。羅綾の袂と翻し。
 五節の舞の年がくりくりは天

天女舞 天上舞返

津内さへも志ばへ。雲の通ひ路
 ありとらして。あめ女の姿をむらん。
 神もこれと愛でけるにや
 法殿俄に震動して。玉の階踏み
 車轉かし。神跡出現ましませり
 あら有強の神國や。お天地開
 けし初より。八百萬の神達守

上サカリ
拍子合ハス

シ天津神上確カリ

獲し終へべ。戎狄蠻夷の恐あへ
 萬民の堵よ安んぜり
 わきて明治聖帝の清代は終り
 開國進取の國是と定め。治よ居
 て礼を忘れ終らず。忠實勇武
 の民を養ひ。純徳器の成就と
 す。め。天壤無窮の皇運を扶

ツレ天女上サカリ

菊も今と盛ると候まの白ひ鳳凰も
 園の梧竹より下りの丹頂の鶴の行
 遊べへ圖員へる亀も河と出て
 庭よよ冬向申しつ邊陵頻かも
 空に翔り霞裳羽衣の曲とあせり
 河草木國土豊は四海の波も四方の
 國々も靡く清代こそ芽出度けり

大正拾年十月二十日印刷
 同 年十月二日發行

著者権限
 顧慮不許

訂正著作者 廿四世 觀世元滋

發行所 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川堂

東京市神田區錦町二丁目拾番地
 東京市四谷區傳馬町貳丁目



終